

# コメント 1

後藤 絵美 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

三人の先生方、お話をありがとうございました。三つのご報告は、時代も地域も違い、アプローチの方法も異なっていました。「装いと規範」というタイトルで研究会をしてきましたが、毎回の報告書にサブタイトルを付けています。今回はどんな言葉がいいのだろうと考えながら聞いていました。

最初に帯谷さんがおっしゃったように、「装いと規範」研究会では、それぞれの時代、それぞれの社会における人びとがどのような美意識を持って何を大切にしていたのか、そしてどのような枠組みの中に生きていたのかに着目してきました。今回のお話をうかがって、そもそも美意識や大切な「何か」は、常にそこにあるのではなく、ある瞬間につくられ、また、じわじわと育っていくものなのだと、あらためて意識しました。

## ■ 誰が日本製「アメリカニ」の価値を決めたのか

### —— 杉浦報告をめぐって

最初の杉浦未樹さんのご報告からわかったのは、しばしば植民者からの影響が強調される植民地統治下の地域の「新しい装い」の中には、複雑な経緯や、影響関係のもとに生まれたものがあったということです。

杉浦さんは、今回「規範」というキーワードを使ってくださって、シャツをめぐる規範——「シャツはどうあるべきか」、洋装をめぐる規範——「何が洋装で何が洋装ではないのか」、「フル洋装には何がどこまでが必要なのか」といった論点にも言及してくださいました。おそらく、そうした「規範」意識も、瞬間、瞬間で異なったりするのだろうとも思いました。

「アメリカニ」という布について、1920年代の東アフリカ地域には、日本製のものが多く入っており、それは厚手で、幅広で、また高価であったということでした。厚いことで耐久性があり、現地の方法で使い勝手がよく、洗えば洗うほど白くなるのが、その日本製「アメリカニ」の価値を高めたというお話でしたが、お伺いしたいことが二つあります。一つは、もともと日本の製法が、他の産地のものと異なっていたの

か、あるいは「現地での需要は厚さや耐久性にある」だとか、「現地ではこういう着方がされる」ということが、マーケティングなどによって判明し、それを考慮した結果、日本製のアメリカニの個性が生まれていったのか、という点です。

もう一つは、誰が「価値」を決めたのか、です。アメリカニのなかでも日本製品に価値が見出されたとすれば、その日本製品の価値は誰が主体となって決めたのでしょうか。もしかすると、一方ではなく、相互、あるいは多方面からのやりとりの中で決まっていたのかもしれないと考えましたが、以上についてお伺いできたらと思います。

## ■ モンペが良いとする価値観はどこから来たのか

### —— 森報告をめぐって

森理恵さんから、以前、ジェンダーとファシズムに関するシンポジウムに参加されるという話を伺って、またその際のご報告タイトルを見せていただいて、ぜひ「装いと規範」研究会でもお話しくささいとお願いしました。

いわゆる「日本の装い」を主題としつつも、日本の国内だけでなく、「外地」にも着目されて、調査を進められているところが、森さんの研究スタイルの大きな特徴だと理解しています。今回幅広い視点からのお話で、多くの刺激を受けました。

ご報告では、モンペが、1920年代以降に農作業着の近代化という形で発明されたという指摘がありました。お聞きしたいのは、「農作業でモンペをはくと良い」といわれた理由や論理が、どのようなものだったのかという点です。それは誰の視点で良いと言われたのか。それまでモンペではないもので農作業をしていた人たちが、なぜわざわざスタイルを変えることが良いと思ったのか。モンペにまつわる価値観の変化について、もう少しお話をうかがえたらと思いました。

モンペの流行に関しても、先ほどの質問と同じく、誰が「モンペが良い」と唱えたのか、どのような考えを共有することで、流行が生まれたのかという疑問

を抱きました。価値観や美意識の変化という部分について、補足しうることがありましたらお願いします。また1930年代あたりですとアップパツパという簡易服がありましたが、下からの、あるいは実用的なものの流行として、モンペやアップパツパは並べて捉えうるものなのかも、お時間があれば伺ってみたいです。

### ■ 川久保に異国趣味的イメージを付与した担い手は —— 安城報告をめぐる ——

三つ目の安城寿子さんのご報告ですが、川久保玲が異国趣味的なイメージを自らは拒絶したにもかかわらず、そこに絡みつかれながら、結局は成功に導かれていったという展開を、とても興味深くうかがいました。安城さんにお聞きしたいのは、異国趣味的なイメージ、コンテンポラリーなイメージを、フランスのファッション雑誌や日本のフランス系のファッション雑誌が提示していったというお話だと思えますが、デザイナー自身、あるいは背後にある企業やスポンサーの方針というのは、それらの表象に関与しなかったのかという点です。自分がデザインした服が勝手に使われ、勝手にイメージ化されているということだったのか、あるいは、ある程度の主体的な関与もできたのかという疑問です。

もう一つ、安城さんのお話で少し複雑だと思ったのは、川久保玲の異国趣味的なイメージ、あるいはそれを語ってきた人が、実は複数いるという点です。パリの雑誌の編集者だと思われる集団と、日本のフランス系雑誌の編集者と思われる集団、あるいはたとえば最後に出てきた展覧会の主催者など、様々なバックグラウンドの人びとが川久保玲に異国趣味的なイメージやコンテンポラリーなイメージを付与してきたということになるかと思えます。そうするとオリエンタリズムという問題にも踏み込んで行けそうな気がしますが、その点はまだ私の方で整理しきれていないので、質問では、安城さんが異国趣味的というときの主体、誰の視点において「異国趣味」なのかという点を教えていただきたいと思いました。

全体として、美意識や大切な「何か」をめぐる感覚や流行が、どのようにしてつくられていったのかという点が、三つのご報告を通して具体的に見えてきたと思います。ありがとうございました。